

平和構築に向けて、本会議に期待すること

今回の会議に参加する NGO の一人として、そして平和を願いつつフクシマの現場に立つキリスト者として、以下に、本会議に期待することを整理して申し上げます。

(1) 「平和」を主題とすることは、極めて意味のあることだと思います。

2014年7月、パウル・シュナイス宣教師が被災地を訪れました。シュナイス師はドイツ人です。1970年代後半から9年間、日本基督教団の幹事として、ドイツから派遣され、日本で働きました。当時、韓国は民主化闘争が激化し、それは光州事件にまで至りました。この時、シュナイス宣教師は、日本の多くの牧師たちと共に、民主化のために、命がけで行動しました。秘密裏にネットワークを形成し、韓国政府による弾圧の事実を知らせる資料を集め、韓国から日本に持ち出し、世界へ発信する。シュナイス宣教師は、そのために毎週韓国と日本を往復したそうです。

これは、一つの良い事例を示します。この時、キリスト者は連帯し、「民主化」を目指しました。東西冷戦が厳しく世界を分断している中でした。教会は当時、人道問題は国連関係の仕事だと信じ、シュナイスさんはしばしば孤立したそうです。しかし、一つの目標に向けて少数の多様なキリスト者が祈りを合わせて結束しました。

今度は、「平和」を目指し、同じような困難の中で、同じように、祈りを合わせて乗り越える。そう、「日韓中 NGO 平和会議」に、期待されます。

(2) 私は、この会議に、「核から解放された世界」を目指して参加します。

私は、日本の東北地方太平洋沿岸への支援を担う NGO の事務局長です。私たちは、放射能の問題に、世界中の兄弟姉妹と共に取り組んでいます。その中で、とりわけ韓国の神学者の助力を得て、一つの言葉を獲得しました。それは「核から解放された世界へ (Towards a Nuclear-free World)」という言葉です。

核は、罪と似ています。それは、私たちを奴隷化します。気が付くと、私たちは核なしに生きられないような気持になる。そして、それは、未来に大きな危険を呼び込みます。罪が、いつか裁かれることと、それはよく似ています。その危険性に気づきながら、しかしやめることが難しい。かつてジョン・バニアン (John Bunyan) は、激しく大きな良心の告発の叫び声を聞きながら、その叫びに耳を傾けることが難しい人間の様子を見事に描き出しました。それは、罪の描写です。そしてそれは、核の描写にも見えてきます。

ヨハネによる福音書 8 章を思い出します。主イエスは、「罪の奴隷」と言っ

てくださいました。そして、その解放を宣言してくださったのです。そのことは、過ぎ越しの祭において行われた最後の晩餐に、見落とすことができないほど、はっきりと示されました。「核から解放された世界へ」という言葉は、主イエスのこの解放の業を踏まえて生まれた言葉です。それは、核に支配された世界からの出エジプトを意味しています。それは、真理によって自由を得る未来を私たちに望見させる言葉です。この言葉は、韓国の民主化闘争の中から生まれた民衆神学によって、鍛えられ、生み出されました。私はその過程に立ち会いました。それは、本当に幸せなことでした。

その先へ、未来へ、今回の韓国での会議から、進みたいと思っています。

(3) 過去に学ぶことは、未来を展望するために、有益です。

一つの批判が想定されます。過去を学ぶことで、未来が見えるだろうか、という批判です。私はその批判への答えを、今年8月の沖縄で見つけました。

19世紀後半から20世紀前半までの100年間、中国と日本との間で、朝鮮半島と沖縄（琉球）と台湾は、それぞれが同じ課題に向き合い、悪戦苦闘しました。

私は、8月14日、一人の運動家に出会いました。この運動家は、学校で明治以前の沖縄の歴史を教えるようにと、1970年代から、運動を展開してきました。

「沖縄」は、もともと琉球と呼ばれた独立国でした。琉球の人々は、日本の明治政府の支配に強く反発しました。理由は、明治政府が軍隊を琉球に置こうとしたからです。琉球の人々は、軍隊があると戦争に巻き込まれる、と知っていました。それで、「武ではなくて礼で勝利する」という方針を、長い間、取って来たのでした。全ての人に、礼儀正しくすることで、すべての人を、友人とする。それが、琉球の知恵でした。

その知恵は、明治政府によって踏みにじられて行きます。私は、日本人として、つまり、琉球の人々とその知恵を踏みにじった人々の子孫として、恥を覚えます。しかし、この苦闘の中で、平和構築への知恵が、悲劇の中で、鮮やかに明示されることに気づきました。

イエス様の死が神の愛をはっきり示したように、歴史の悲劇の中で、人類の知恵は輝くのだと思います。ですから、歴史に学ぶことは、非常に有益です。但し、それは、敗北の歴史に学ぶことでなければなりません。勝利の歴史を学んでも、おそらく、得られるものは少ない。敗北の中で、理不尽に踏みつぶされる道理がある。それを見詰める時、未来への道が見えてくるでしょう。

十字架と復活の信仰に基づいて学ぶならば、私たちは、過去に学び未来を見出せると信じます。

(4) 韓中日の歴史的人物から学ぶことは、有益です。

沖縄の運動家は、沖縄の中にある問題に注目していました。なぜ、琉球は、日本に負けてしまったのか。そして、今、何が課題なのか。

彼は、ヴィジョンのなかった先達の問題を指摘しました。そして、「基地のない沖縄」を構想できない自分たちを反省しました。それは、「核のない世界」を構想できない私たちの課題と共通します。

そして更に、彼は、血を流す戦いを避けた先達の限界を、先輩への尊敬を失わずに、悲しみを込めて、指摘していました。私は、台湾と朝鮮半島の皆さんのことを思い出して、その話を聞きました。確かに、そこには、沖縄独特の課題が残されているのだと思います。

結局、注目すべきは人である、ということだだと思います。清国政府・明治政府の間で、何人もの英雄的な人々が、その人生をかけて、未来を模索しました。どんな大きな政治的・歴史的決断も、最後は一人の人間が下す決定が生み出すものです。神様は、このようにして歴史を動かされる。人間に注目するならば、そこに、神様の業が見えてくる。そして、私たちも人間として、神様の業に参加するよう励まされる。

私たちは、互いから学び知り合う必要があります。あまりにも、私たちは互いを知らないので、今、戦争の噂を聞くような東アジアになってしまいました。その現実の大きさに圧倒されて、戸惑っているのが私たちです。

しかし、この現実も、人間が下す決断の積み重ねに過ぎない。歴史上の人物に学ぶとき、私たちはそのことを知らされます。そしてもし、韓国・中国・日本の私たちキリスト者が、互いにつながり合った人物について学ぶことができたなら、きっと、平和への道も、見つけられるのではないか。その道の中に、「核から解放された世界へ」の道も、見つけられるのではないか。私は、そう、期待します。

(4) DMZに行くことは、有益です。

但し、歴史的人物に学ぶときにも、注意が必要です。その人の勝利と栄光を学ぶのではだめだ、ということです。そうではなくて、その挫折と蹉跎に学ばなければならない。そのことを考えると、DMZに行くことは有益でしょう。あるいは、将来は、中台海峡や、沖縄や、済州島カンジョン村、そしてフクシマに行くことが有益です。

なぜでしょうか。そこには、私たちの限界と愚かさが露出しているからです。私たちは、過去の人物の能力と努力にもかかわらず目の前に展開してしまっているこの異常な暴力の現実を、見詰めるべきです。

互いの過去の人物の栄光ではなく、その限界と帰結を、辛くても、具体的に、見つめること。それは、きっと、DMZを訪問することによって実現するでし

よう。そのことに、とても大きな意味を感じます。

私たちは、以上のような展望を以て、「第1回 国際平和NGOカンファレンス」の時を持ち、その成果を神様にささげたいとおみます。どうか、平和の主が、私たちの小さな一歩を祝されますように。

以上、東北ヘルプ事務局長 川上直哉が申しあげました。